「世界の視点をめぐる思想史的研究」の活動報告

研究代表者　栗　原　　隆

本プロジェクトは，井山弘幸教授，城戸淳准教授，宮﨑裕助准教授，そして栗原隆が中心となって展開されている。

2012年度は，2012年４月に立ち上げが認められた，人文社会・教育科学系附置「間主観的感性論研究推進センター」，ならびに，「科学研究費補助金（基盤（A））」を受けた共同研究「共感から良心に亘る『共通感覚』の存立機制の解明，ならびにその発現様式についての研究」，さらには，「新潟大学人文学部哲学・人間学研究会」と輻輳する形で，多面的な研究が実施された。本プロジェクト・メンバーによって行われた2012年度の研究会活動を以下に掲げる。

９月16日（日）―― 科学研究費補助金（基盤（A））「共感から良心に亘る『共通感覚』の存立機制の解明，並びにその発現様式についての研究」主催の研究会

「心理と真理 ―― 心の裏を解き明かすことはできるのか」（「ときめいと」講義室A）

13時30分～17時30分

日本学術振興会：阿部ふく子研究員「常識と思弁のあいだ ―― ニートハンマーとヘーゲルの思索から ――」

（新潟大学）栗原隆「若きヘーゲルと心理学」

（立命館大学大学院）吉田寛准教授「ビデオゲームへの感性学的アプローチ ―― 表象／認知／行為」

（横浜国立大学教育人間科学部）小野康男教授「時間の前で美は」

（新潟市芸術文化振興財団常務理事）田中純夫氏「ハイデガーの技術論」

11月28日（水）――「ヘーゲル・アーベント」

「人間学ＰＳ」18時00分～19時30分

栗原隆「瞬間と全体 ―― ヘーゲルを介してラオコーン問題を振り返る」

12月23日（日）―― 人文社会・教育科学系附置「間主観的感性論研究推進センター」主催の研究会

「新潟大学東京事務所」の入っている「ＣＩＣ」の「多目的室１」

13時30分～17時00分

（新潟大学）栗原隆「（報告）プラトナーの生の有機体哲学」

（大阪大学）福田覚准教授「啓蒙主義時代の想像力概念 ―― ヴォルフ，Ｅ.Ａ.ニコライ，ズルツァーを例として ――」

（大阪大学）津田保夫准教授「プラトナーの人間学」

2013年３月２日（土）―― 人文社会・教育科学系附置「間主観的感性論研究推進センター」主催の国際シンポジウム

「ときめいと」講義室Ａ・ミーティングルームＡ

14時00分～19時00分

Takashi Kurihara：（Bericht）“Kontinuität und Identität : Das von Reinhold aufmerksam gemachte Zweifel, daß Schelling über” Identität “von Bardili plagierte”

Christoph Jamme：（Vortrag）“Wahrheit für die Phantasie ―― Der junge Hegel und Herder”

Manfred Frank：（Vortrag）“Identität der Identität und der Nichtidentität”

（Kommentator）Yoichi Kubo, Taiju Okochi, Yoshikazu Takemine

（Dolmetscherin）Yuko Mitsui

（Diskussion）

2013年３月13日（水）―― 科学研究費補助金（基盤（Ａ））「共感から良心に亘る『共通感覚』の存立機制の解明，並びにその発現様式についての研究」主催の研究会

ケルン大学・中央研究棟4013号室

11時00分～13時00分

Takashi Kurihara : “Natur und Leben ――》Ideen zur einer Philosophie der Natur《 Schellings und der junge Hegel ――”

機関誌『知のトポス』Ｎｒ．８（2013年３月21日）の刊行

哲学・人間学・倫理学研究の，αにしてΩは，翻訳であることを踏まえて，2012年度も，有意義な翻訳・紹介ができた。内容は左記の通りである。

Ｊ・Ｆ・フラット

心理学講義（1790年冬学期）

Ｇ・Ｗ・Ｆ・ヘーゲル

心理学と超越論哲学のための草稿

栗原　隆・阿部　ふく子　訳

Ｇ・Ｗ・Ｆ・ヘーゲル

Ｇ・ガルヴェ『諸能力の検証についての試論』からの抜粋

栗原　隆　訳

エッカート・フェルスター

カント以後の哲学の展開にとっての『判断力批判』

第七六～七七節の意義（第一部）

宮﨑　裕助・大熊　洋行　訳

ヴェルナー・ハーマッハー

エクス・テンポレ

カントにおける表象（Vorstellung）としての時間（上）

宮﨑　裕助・清水　一浩　訳

マルティン・ハイデガー
　時間の概念
　　田中　純夫・阿部　ふく子　訳
論考「L・クラーゲスの表現概念」
　　深澤　助雄

2013年度も，活発な活動を続けていることを申し添えたい。
（文責・栗原　隆）

〈声〉とテクスト論

研究代表者　**高　木　　裕**

1．プロジェクト名：〈声〉とテクスト論

2．プロジェクト概略

本プロジェクトの目的は，〈声〉の文化が，これまでの歴史の中で，テクストの文字言語との鬩ぎ合いから始まり，制度的なさまざまな制約と葛藤，軋轢を繰り返してきたことを確認するとともに，文学・思想・メディア文化が〈声〉の根源的な力，豊饒な力をいかに再生させるために工夫してきたか，その諸相を例示し，さらに〈声〉から，いかに新しい発想と表現可能性を得てきたかを，具体的に明らかにすることである。そこに新たな人文科学研究の可能性がある。

当面は，〈声〉と制度の様々な関係を，歴史的かつ領域横断的に検討するために，各国文学（日本文学，中国文学，朝鮮文学，イギリス文学，フランス文学，ロシア文学，アメリカ文学），映像論，啓蒙思想などを専門とする研究者をメン